

【原著】

徳島大学生物資源産業学部の個別選抜改革

—高大接続改革実行プランを受けた多面的・総合的評価の設計と実施—

植野美彦（徳島大学総合教育センターアドミッション部門）

徳島大学生物資源産業学部は、6次産業化を推進する新しい人材育成を行うことを目的に、我が国で類をみない新学部として、2016年4月に設置された。当学部の個別選抜においては、中央教育審議会答申（2014）及びその翌月に策定された、高大接続改革実行プラン（2015）で示している、学力の3要素から構成される「確かな学力」の評価を網羅するなど、多面的・総合的に評価する個別選抜の開発を行う必要があった。本稿では、アドミッション・ポリシーと当選抜の設計過程、並びに設置初年度における入学者選抜の概要と実施状況を報告する。

1 はじめに

生物資源産業学部の個別選抜は、2015年1月に策定された「高大接続改革実行プラン（以下、実行プランと略す）」を実証の場として位置づけたものであり、特定の選抜区分で多面的・総合的評価を実施したのではなく、全ての選抜区分で実施したことに特徴がある。2020年度に導入予定である「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」が社会で広く注目されているが、実行プランの工程表の中で、2015年度以降の入学者選抜より個別選抜改革の検討・実施が示されている。当学部は完全な新設学部の特性から、従来の選抜方法に縛られることなく、実行プランの強い方向性に沿った多面的・総合的評価による入学者選抜の導入が実現できた経緯をもつ。

本入学者選抜の大きな特徴としては、アドミッション・ポリシー（以下、APと略す）に基づいて多面的・総合的評価を実施することはもとより、APの「求める人物像」に対応したきめ細かな選抜方法の重点評価項目¹⁾と一貫して連動させたことである。多面的・総合的評価においては、APの明確化が必須要件であり、具体的な選抜方法・内容よりも、受験生や高等学校に説明責任を果たせるAPの設計に力を注いで、入試制度開発を行ったことを強調しておきたい。

2 アドミッション・ポリシーの明確化

2.1 アドミッション・ポリシーの設計

当学部のAPは、「学部統一AP」「求める人物像」「入学者選抜の基本方針」の3つの構造によって成り立っている。2015年3月に文部科学省から公表された「現行の大学のアドミッション・ポリシー（入学者受入方針）に関する資料（以下、AP事例集と略す）」で示されるポイント（表1）が、中央教育審議会答申（2014）に沿って整理されており、当学

部の3つの構造に概ね合致している²⁾。また、近年では、西郡（2014）によって「入学者受入れ方針」実質化の提起がなされており、APと個別試験との対応関係を明確に示し、受験生が理解しやすい受入れ方針のあり方について言及している。今後の入学者選抜改革では、APを各選抜方法と評価方法へ機能させることが大きな焦点となる。当学部では今までの経験値に頼ることなく、選抜に機能し得るAPの設計を行った。

当学部は新設学部であるため、実行プランが公表された2015年1月末から、設置認可申請を行う3月末までの2ヶ月間で、APの策定と入学者選抜概要の決定を進めていく必要があった。アドミッション部門と生物資源産業学部設置準備委員会にて、スピード感を持って検討を進めた。検討を進める上で、当学部のAPにおける3つの構造について策定した経緯、内容などを以下に示しておく。

表1 AP事例集（文部科学省, 2015: 1）

アドミッション・ポリシーに盛り込むべきポイント

- ①各大学の強み、特色や社会的な役割を踏まえつつ、大学教育を通じてどのような力を発展・向上させるのか。
- ②入学者に求める能力は何か。
- ③入学者選抜において、高等学校までに培ってきたどのような力を、どのように評価するのか。（どのような要素に比重を置くのか、どのような評価方法を活用するのかなど）

2.2 アドミッション・ポリシーの3つの構造

2.2.1 構造① 学部統一AP

表2は、当学部の学部統一APである。ディプロマ・ポリシー（DP）、カリキュラム・ポリシー

(CP) との一体的な策定の観点から、この 2 つのポリシーを軸に、AP の全体像をわかりやすく簡潔に示している。AP 事例集で言うならば、ポイント①に示されることに該当するものと言えよう。

表 2 生物資源産業学部 学部統一 AP (2016 年)

生物資源産業学部では、バイオテクノロジーを応用した生物資源の生産、医薬、食品としての有効利用に関連する幅広い知識、国際的に通用する専門性、バイオ産業創出に必要な起業マインドを持った人材の育成を目的としています。そのため、生物資源産業学部では、次のような人物を求めています。

2.2.2 構造② 求める人物像

表 3 は、当学部における求める人物像の 6 観点である。求める人物像については、「学力の 3 要素」を網羅することを念頭に設計している。当学部が独自で設定した「探究力」を除いては、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体性・多様性・協働性」を 5 つの求める人物像に反映させている。また、AP 事例集で言うならば、ポイント②に示される「入学者に求める能力は何か」に該当する。

表 3 生物資源産業学部 求める人物像 (2016 年)

求める人物像	定義
関心・意欲・態度	バイオテクノロジー、生命、医療、食料、農業、環境に強い関心と学びに対する意欲があり、自分で明確な目標をもっている人
探究力	自分が関心を持ったことを深く掘り下げようとする人
表現力	自分が伝えたいことを相手に表現できる人
知識・教養 ³⁾	本学部の専門分野を学ぶために、高等学校で身につける文科系・理科系にわたる基礎的な知識・教養をもつ人
思考・判断力	今までの知識・教養をもとに思考を深めて適切に判断できる人
協働性	問題解決のために、国籍や世代、考え方にとらわれることなく、対等の立場で協力できる人

2.2.3 構造③ 入学者選抜の基本方針

当学部の入学者選抜の基本方針については、推薦入試 I・II、一般入試前期・後期の合計 4 つの選抜

区分でそれぞれ明文化して定めているが、紙幅の都合上、4 つの選抜区分で設定される「入学者選抜方法」と前述の「求める人物像」を重点評価項目として設定した関係性を、図 1 で示しておく。

横軸：重点評価項目＝求める人物像 (AP)

学力の 3 要素を網羅

	関心・意欲・態度	探究力	表現力	知識・教養	思考・判断力	協働性
センター試験				○	○	
総合問題		○	○		○	
集団面接			○		○	○
集団面接	○		○			
個人面接	○			○		
調査書	○					○
志望動機書	○		○			
学びの設計書		○	○			

縦軸：選抜方法⇨多面的・総合的評価

選抜の細分化

図 1 選抜方法と求める人物像の関係性 (2016 年)

図 1 は、入学者選抜の基本方針策定の際に土台となったものである。4 つの選抜区分の基本方針を明文化したものよりも、マトリクス形式で示した方が一般の受験生においても理解しやすいであろう。明文化したものは、単純に図 1 を 4 つの選抜区分に応じて、文章として書き起こしたものに過ぎない。4 つの選抜区分におけるそれぞれの入学者選抜の基本方針は、図 1 の縦軸の選抜方法 (多面的・総合的評価) と、横軸の求める人物像 (AP) を重点評価項目として設定し、それを各選抜区分で組み合わせて、選抜方法と AP を一貫して連動させたものである。

新たに入試制度を設計する際は、AP 事例集のポイント③に示されているように、「入学者選抜において、高等学校までに培ってきたどのような力を、どのように評価するのか」を意識した設計が必要である。当学部が設計した入試制度は、これらのことを図 1 で示す通り、明確化させたことが最大の特徴と言える。

例えば、各大学の入学者選抜要項では、一部において、面接を課す場合、面接とのみ記載されているケースが見られる。面接形式か討論形式かさえ判別ができず、これでは何がどう評価されるかが曖昧なままとなり、AP の明確化に直結しにくい。また、面接の内容を明記したとしても、短時間で求める人物像のすべてを公正に評価することは、難しいことが予測される。当学部では、集団面接において「関心・意欲・態度」「表現力」以外の評価を原則行わず、「思考・判断

力」「協働力」の評価を行う場合には、集団討論で評価するなど、単に面接と言っても、よりきめ細かな方法で評価することを意識している。

3 生物資源産業学部設置初年度の入学者選抜

3.1 入学者選抜内容の設計

入学者選抜内容の設計は、AP と選抜方法を一貫して連動させているため、各入学者選抜区分で「求める人物像（重点評価項目）」のウエイトが偏ることのないように選抜方法を組み合わせた。まず、各入学者選抜区分の配点はすべて 1000 点満点に統一し、知識・技能類を除いた要素（思考力・判断力・表現力、主体性・多様性・協働性等）における受験生の多様な能力にかかるウエイトに変化をつけて（図 2）、総じて多面的・総合的評価に資する選抜設計を行っている。

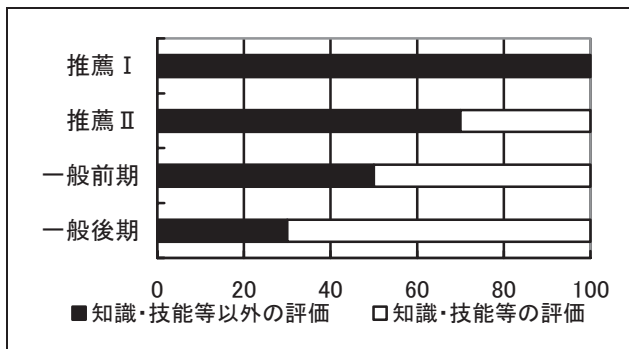


図 2 受験生の多様な能力にかかるウエイトイメージ

3.2 入学者選抜概要と実施状況

表 4 で示したものが、設置初年度の入学者選抜概要である。各選抜区分において、わかりやすい呼称をつけている。これは、中央教育審議会答申（2014）において、一般入試・推薦・AO 入試の区分を廃止する方向性に基づいたもので、各選抜区分で何を重視するか、あるいはどのような学生を求めているかについて明確化させたものである。各選抜内容については、一部書類選考などで従来の選抜手法と異なる内容のものが見られるが、前述で示した面接を細かく分けて評価したことを除き、概ね従来型の方法を組み合わせている。これは、従来にない選抜手法の開発が進むと、高等学校の進路指導に負担と混乱を招く可能性があり、このことは大学側でも認識しておきたい。また、多面的評価の観点から、設定した選抜方法よりも具体的な選抜内容や実施方法に大きな特徴がある。このことは、具体的な 4 つの事例を示し、後述するものとした。

初回の志願状況は、表 5 で示した通りである。特徴のあった選抜区分を簡単に考察すると、一般入試前

期の志願倍率は 2.6 倍となっており、落ち着いた結果となった。総合問題や集団面接を課すなど、受験生からすれば負担の多い個別試験となるが、2015 年 4 月当初から具体的な選抜内容を広報できたことがこの結果に繋がったと考えられる。しかし、推薦入試 I は、専門高校等枠で定員を割り込んでおり、課題があった。このことも後述するものとした。

表 4 生物資源産業学部 入学者選抜概要（2016 年）
一般入試（前期）「確かな学力」重視型

選抜方法	配点（1000 点満点）
センター試験（5-7）	500 点
総合問題	300 点
集団面接	200 点

一般入試（後期） 知識・思考力重視型

選抜方法	配点（1000 点満点）
センター試験（5-7）	700 点
総合問題	300 点

推薦入試 I 地方創生型（専門高校等枠／地域枠有）

選抜方法	配点（1000 点満点）
センター試験	課さない
調査書	100 点
志望動機書	150 点
学びの設計書	150 点
集団討論	300 点
個人面接（口頭試問有）	300 点

推薦入試 II 人物重視型⁴⁾

選抜方法	配点（1000 点満点）
センター試験（3-4）	300 点
調査書	100 点
志望動機書	100 点
学びの設計書	100 点
集団討論	200 点
集団面接	200 点

表 5 生物資源産業学部 志願状況（定員：100）

選抜区分	入学定員	志願者	志願倍率
一般・前期	50	130	2.6
一般・後期	20	154	7.7
推薦 I	8	6	0.8
推薦 II	22	43	2.0

※推薦 I は専門高校等枠、私費留学生入試等は割愛

3.2.1 総合問題の可能性

一般入試（前期・後期）は、個別試験で総合問題を課している。一般入試（前期）は「確かな学力」重視型⁵⁾とし、この「確かな学力」を丁寧に評価する方法として総合問題を課し、主体性を深く評価するために集団面接を合わせて課している。

最初に、国公立大学の一般入試における総合問題の実施状況を簡単にまとめておきたい（表 6）⁶⁾。

国立大学で総合問題を実施した学部は、前期日程を実施した 387 学部⁷⁾のうち、13 学部（実施率 3.4%）で、後期日程を実施した 314 学部のうち、25 学部（実施率 8.0%）となっている。実施数は僅少であるが、内訳を見ると後期日程の実施が高い様子が伺える。学問系統別では、教育学系と後期日程の理系の実施が目立つ。これらは、特定の大学で実施しているケースが多く、愛知教育大学が前期・後期で 1 学部 14 区分、千葉大学が後期のみで 6 学部 15 区分となり大勢を占める。なお、前期と後期の双方で総合問題を課す国立大学は、本学生物資源産業学部のみである。

また、公立大学で総合問題を実施した学部は、前期日程を実施した 167 学部のうち、12 学部（実施率 7.2%）で、後期日程を実施した 138 学部のうち、10 学部（実施率 7.2%）となっている。

総じて、国公立大学の総合問題の実施数は、少ない現状がある。このことは、大学側の作問負担に対する懸念や、個別試験の負担が大きいという受験生側の認識により、出願の敬遠に繋がる可能性があるため、総合問題の実施が進まなかったことが予測される。

表 6 一般入試で総合問題を課す国公立大（2016 年）

	国立 前期	国立 後期	公立 前期	公立 後期
大学数	12	15	10	8
学部数	13	25	12	10
参考：学問系統別（選抜区分単位の累計）				
人文・社会科学	5	13	6	3
教育学／教員養成	9	4	2	2
教育学／総合科学	5	4	—	—
理学	4	3	—	—
工学	1	14	—	—
農学	2	3	—	1
医・歯・薬学	—	7	8	4
その他	2	—	4	1
合計	28	48	20	11

出所) 河合塾「Guideline 2015 年 10 月号」より筆者作成

この境遇の中でも、当学部が総合問題を課すことに至った経緯は 2 点ある。

1 点目は中央教育審議会答申（2014）の中で、各大学における今後の個別試験のあり方が示されていることに起因している。個別試験の方向性では、「主体性・多様性・協働性」の評価を軸とし、「大学入学希望者学力評価テスト〈仮称〉」と個別試験の双方で「思考力・判断力・表現力」を評価することが示されている。「主体性・多様性・協働性」「思考力・判断力・表現力」を評価するには、一般入試の記述試験としては、小論文が妥当ということで学内協議を進めていた。当学部の母体となった工学部生物工学科において小論文を一般後期日程で課していたこともあり、評価方法が蓄積されていたことも大きい。そして、当学部の入学後の学修に大きく影響される、化学の知識・思考力を綿密に評価したい意向があり、特定の教科試験ではなく、教科を跨る複合的な出題形式を考える必要があった⁸⁾。従来の選抜方法においては、総合問題以外に方法がなく、採用は自然なものであった。

2 点目は、総合問題は教科に特定されず、柔軟な出題方法が取れることにある。例えば、化学の実験データの解析力を問う出題などは、数学的な視点が要求されるため、合教科型の試験を採用することも考えられ、場合によっては、当学部への関心の深さを問うような設問も可能である。このことにより、総合問題では当学部が真に求める人物を深く評価でき、試験問題作成担当委員は作問の負担を躊躇せず、高いモチベーションを維持し、問題作成に取り組むことができた。

この総合問題は、多面的・総合的評価に適した選抜方法として、2016 年に開設された学部の一般入試で、少数ではあるが採用されつつある⁹⁾。受験生から総合問題は受験準備が取りにくいと考えられやすいが、概ねこれらの大学では、総合問題の出題方針と具体的な出題内容を明らかにしており、不安の払拭に繋がっている。当学部においても、サンプル問題と具体的な選抜内容（表 7）を公表して、受験準備に配慮した。

表 7 総合問題における選抜内容（2016 年）

日本語で書かれた文章や図表等により、下記の力を問う記述・論述式の出題を行う。
1, 化学（化基・化）に関する基礎学力とそれに関連した数学的視点をを用いた思考・判断力
2, 現代の社会における諸問題（バイオテクノロジー、食料、農業等で抱える問題）への深い関心と、自らの考えを表現する力。

3.2.2 書類選考と面接の細分化

書類選考においては、調査書の他に、高校生活を踏まえた当学部を選択したきっかけ（今まで）を記述する志望動機書¹⁰、大学入学後の計画（これから）を記述する学びの設計書を課している。志望動機書は「関心・意欲・態度」「表現力」、学びの設計書は「探究力」「表現力」を重点的に評価する。特に、学びの設計書は、入学後から将来への計画を設計するには、多様な資料を調べる力も要求される。これは、大学院入試で重視される「研究計画書」に近いものであり、これを書くことで出願前に自分が進みたい分野かどうかを真剣に考えさせるといふ大きな意味を持つ。

また、書類選考のすべてを配点化したことにより、合否への影響度が高くなった。このことで、高等学校より本人自筆か否かの書類の信憑性（他者による関与）について指摘を受けた。この指摘に対しては、面接実施時の質問内容に一定の方術を講じていることや、面接試験当日に本人自筆の提出物を求めた工程を加えて、筆跡のチェックにより不正防止に取り組んでいる。

面接については「個人面接（化学基礎に関する口頭試問あり）」「集団面接」「集団討論」の3つに細分化して、重点的に評価するポイントをAPに基づいて違いを置いた。また、各面接では、入学者選抜要項で公正な評価を実施するために、表8で示す通り、可能な範囲の選抜内容を公開することにした。紙幅の都合により、集団討論と集団面接のみ紹介したい。

表8 集団討論と集団面接の選抜内容（2016年）

<p>集団討論 ※推薦Ⅰ・推薦Ⅱで課しているもの</p> <p>概ね3名～6名を1グループとし、複数の評価担当者による集団討論を行う。試験準備室で、テーマの提示（バイオテクノロジー、食料、農業関連）・説明ののち、15分間で自分の見解のまとめ（所定の記述用紙の記入と提出有）を行う。試験室で最大20分間の討論を行う（終了5分前よりまとめ）。討論の進行役は評価担当者が行い、発言は原則として挙手制によって実施する。</p>
<p>集団面接 ※推薦Ⅱ・一般入試前期で課しているもの</p> <p>概ね3名～6名を1グループとし、複数の面接担当者による集団面接を行う。志望動機・志望理由を中心に面接を約20分～30分間で行う。提出書類等の確認をする場合があり、発言は原則として順番制によって実施する。</p> <p>※一般入試（前期）では、集団面接開始15分前に試験準備室で現代の社会における諸問題（バイオテクノロジー、食料、農業等で抱える問題）に関するテーマを提示し、その考察を集団面接で簡潔に述べてもらう。</p>

集団討論は、「表現力」「思考・判断力」「協働力」を評価するものとしているが、「思考・判断力」を深く評価するため、あらかじめ指定したテーマに対しての考察と記述を行い、提出用紙の内容と口述内容の双方で評価する形態をとった。また、提出用紙を施すことで、集団討論時に他者の発言をそのまま転用できない仕組みとなっている。通例における集団討論は、司会者、書記などを立てるが、より公平性を期すため、受験者は考察の発言に集中させ、司会進行は評価に原則加わず、受験者に同じように発言する機会を与え、公平な評価ができるように配慮することとした。

集団面接は、推薦Ⅱの他に一般入試前期でも課していることが特徴で、「関心・意欲・態度」「表現力」を評価するものとしている。特に、一般入試で面接を課すことについては、量的課題と公平性の担保が求められ、このことについて実証の場から報告したい。

一般入試（特に、前期日程）で面接を行うことは、量的課題もあり、志願者の多い医学部医学科などは2段階選抜を行っている大学が見られる。しかし、地方国立大学の理工系、農学系で2段階選抜を行うことは前例が少なく、学生募集に対するリスクも考えられる。また、個人面接では仮に200名の受験者があった場合は、200回に渡る面接を1日で行わなければならないが、1回で複数の受験者を評価できる集団面接で実施することが合理的である。しかし、集団面接となると、複数の受験者に配慮した質問を行う必要があり、公平性の担保が必要となる。例えば、農業関連の関心について同じ質問を行う場合は、発言の順番が遅い受験者が有利となる可能性がある。各々に内容の異なる質問をすることも考えられるが、質問内容の蓄積や評価に負担が生じる。このことを解決するために、表8の※印で示す内容を事前に公表した上で、面接当日に本事項に関わる質問を用意し、他者の発言を転用しにくい方術を講じた。受験生側からは、生物資源産業で抱える問題の理解とその課題解決策などを提示する様子が同われ、一般入試においても、「確かな学力」の要素である主体性を丁寧に評価することが実現できた。

そして、多数の受験者を評価することによって、実施当日の評価担当における評価能力が消耗しないように配慮することも必要である。その解決策として、司会進行役は原則として評価を行わず、進行に集中し、集団面接の考察時間に司会進行役が試験監督を担当し、評価者は休息を取る実施運営を進めている。

なお、一般入試（後期日程）については、「知識・思考力重視型」とし、面接を一切課していない。表現力の評価（特に、口述による表現力評価）は面接

試験が妥当と考えられる傾向にあるが、必ずしも面接で能力を十分に発揮できない受験生も存在する。多面的・総合的評価は、多様な背景をもつ学生に配慮する観点からも、学部の特性によっては、面接を課さない選抜区分を残しておくことが必要と考えられる。

3.2.3 地方創生型と地域枠

地方創生型¹¹⁾は、農業、工業、商業、総合学科を対象とした専門高校等枠であり、地域産業界と結びつきの強い専門教育を行っている学生を対象に、地方創生に意欲のある学生の受入を目的としている。

本学は、各国立大学第 3 期に新設された運営費交付金の重点配分のうち、地域に貢献する取組とともに、強みを生かした世界ないし全国的な教育研究を推進する取組を選択している。このことから伺えるように、従来から地域と一体となって改革を推進しており、国立大学農業系で前例の少ない「地域枠（定員 8 名のうち 4 名）」を設定している。なお、この地域枠については本学が主体となって設定したものではなく、徳島県からの強い要請のもとに設定したものである。本学は中国四国地区国立大学の中で、唯一農学系がなかった大学であり、公立大学のない地域であることから、当学部の設置と地域枠の設定は所在地域のニーズに叶ったものである。

地域枠を設定したことで、県内の該当学科をもつ高等学校に訪問したところ、期待の声が多く、当学部の進学を視野に入れた教育再編を行う高等学校も出てきている¹²⁾。しかし、出願対象となる一部の高等学校では、専門高校等の特性上、不合格になった場合の進路変更が難しく選抜時期を憂慮した声、入学後の学修に支障は出ないかという声が出た。よって、専門高校等の実態に沿った選抜を行うことから、対象高校との高大連携を推進していくことが今後の課題である。

また、この度の選抜結果は、出願者数が少ない結果となった。地域枠の定員は満たしたものの、県外からの出願は僅かであった。地域枠を設定したことで、県外高等学校から県内高等学校が有利という先入観を与えてしまったことも予測され、地域枠を除いた一般枠（4 名）は県内外関係なく公平な選抜を実施していることを積極的に広報する必要がある。

3.2.4 アドミッション機能の強化に向けて

平成 28 年 3 月 31 日に公表された、高大接続システム改革会議「最終報告」においても、多面的・総合的評価による入学者選抜を支える体制整備の方向性が示され、アドミッション・オフィスの整備・強化がさ

らに求められる。本学では、学部と強い連携のもとにアドミッション機能の充実、整備強化を進めている。

多面的・総合的評価を公正かつ丁寧に推進していくためには、習熟した評価者が必要である。よって、これまで蓄積した生物資源産業学部着任教員の高い経験値を生かしつつ、新しく開発した評価方法の全体共有を目的として、表 9 に示す研修を実施した。本研修内容はアドミッション部門で立案し、当学部と協働して実施したものである。

表 9 評価者研修一例

手順	内容
1	入学者選抜概要再確認と評価方法研修
2	集団討論模擬評価研修・評価方法検証
3	推薦入試Ⅰ評価方法の統一・実施運営確認
4	推薦入試Ⅱ評価方法の統一・実施運営確認
5	一般入試前期評価方法の統一・実施運営確認
6	入学者選抜検証

アドミッション機能の強化に向けては、今後の財政措置に期待したいところだが、現状において、学部教員とアドミッション部門で協働しながら、実施運営の棲み分けを行い、多面的な視点による評価精度をさらに向上させていくことから進めたいと考えている。

4 おわりに

生物資源産業学部の個別選抜は、これまで述べた通り、学力の 3 要素を網羅した AP と一貫して連動させたこと、AP の「求める人物像」に対応したきめ細かな選抜方法を公正かつ丁寧な評価によって実施したことで、多面的・総合的評価を概ね実現できたものと考えている。しかし、この多面的・総合的評価は、あくまで高大接続システム改革のひとつの要素に過ぎないことを忘れてはならない。入学者選抜改革と大学教育改革が一体となって、高等学校と大学をうまく接続させることが、真の改革の姿となろう。

生物資源産業学部の第 1 期生は、入学して 1 年に満たないため、当学部の個別選抜の評価はこれからとなるが、入学定員の約 1/3 にあたる学生で農業サークルである「アグリクラブ」を自ら立ち上げ¹³⁾、精力的な活動が見られるなど、主体性の観点では学内の教職員から評価が高い。アドミッション部門では、選抜時の書類審査で課されている「学びの設計書」を発展的に活用し、関係部局と連携した上で、追跡調査を開始したところだ。これにより、当選抜の妥当性と信頼

性を検証し、真の大学教育改革と入学者選抜改革が一体となって推進できたかどうか、長期的な追跡を行うことを考えている。

徳島大学全学としては、アドミッション部門と各学部で連携の上、生物資源産業学部の個別選抜改革をモデルとし、APの具体化、そしてAPと各選抜方法との整合性を検証するなど、全学的な選抜改革を推進している途上である。多面的・総合的評価の本質を損ねないように、将来有望かつ潜在能力のある学生を取りこぼすことのないよう、「手間をかけた丁寧な選抜」をめざすところである。

注

- 1) 重点評価項目については、後述される「求める人物像」の6つの内容までの記載に留めている。具体的な評価方法、採点基準、及び評価結果等については、入学者選抜の公平性を期するため、割愛した。
- 2) 生物資源産業学部のAPは、AP事例集が公表される前に策定したもの。
- 3) 知識・教養については、平成29年度入学者選抜要項より、高等学校で修得すべき具体的な内容(各教科単位)を加え、さらに詳細な記載を行っている。
- 4) 推薦入試Ⅱの「人物重視型」は平成29年度入試より「主体性・表現力重視型」に呼称変更。
- 5) 「確かな学力」は、学力の3要素から構成されるもので、生物資源産業学部の入学者選抜の基本方針では、累次の答申における明示に沿って「知識のみならず、学ぶ意欲や自分で課題を発見し、主体的に判断・行動する資質」として定義づけている。「確かな学力」重視型は、生物資源産業学部設置準備委員会で呼称を命名したもの。
- 6) 総合問題は「総合」と明記された選抜方法を対象とする。また、同じ大学内の選抜区分で共通の総合問題を課すケースがあり、総合問題の本数による累計ではない。なお、本稿において、学部ベースで分析を行っているが、対象学部すべてで総合問題を実施していることではないため、詳細は学問系統別の累計を参考されたい。
- 7) 文部科学省発表、平成28年度(2016年度)国公立大学入学者選抜確定志願状況——「出願受付実施大学・学部数」の数値に基づく。
- 8) 中央教育審議会答申(2014)の公表時において、各大学における個別選抜の方向性では、従来の教科型試験について示されていなかった背景がある。
- 9) 西日本地区国立大学では、本学生物資源産業学部の他に、愛媛大学社会共創学部産業マネジメント学

科、佐賀大学芸術地域デザイン学部芸術地域デザイン学科地域デザインコース(いずれも、2016年4月開設)などで課されている。

- 10) 志望動機書は平成29年度入試で廃止し、平成30年度入試から四国地区国立大学連合アドミッションセンターで開発した活動報告書に変更する。
- 11) 「地方創生型」の呼称は、本学第12代学長である香川征先生が命名したもの。
- 12) 徳島県立那賀高等学校森林クリエイト科(2016年4月開設)、徳島県立城西高等学校アグリビジネス科(2017年4月開設)など。
- 13) 徳島新聞(2016).8月19日付朝刊「農業知るには現場から 徳島大生30人『アグリクラブ』設立」にて、本取り組みは紹介された。

参考文献

- 中央教育審議会(2014)。「新しい時代にふさわしい 高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について」(答申)
- 河合塾(2015)。「Guideline 2015年10月号」河合塾 国立大学協会(2015)。「高大接続システム改革会議『最終報告』に向けて」
- 国立大学協会(2016)。「高大接続システム改革会議『最終報告』を受けて」
- 高大接続システム改革会議(2016)。「高大接続システム改革会議『最終報告』」
- 文部科学省(2015)。「高大接続改革実行プラン」
- 文部科学省(2016)。「平成28年度国公立大学入学者選抜確定志願状況」
- 文部科学省大学入試室(2015)。「現行の大学のアドミッション・ポリシー(入学者受入方針)に関する資料」
- 西郡大(2014)。「実質的な活用に向けた『入学者受入方針』の見直し」『大学入試研究ジャーナル』, 24, 113-119.
- 徳島新聞(2016).8月19日付朝刊「農業知るには現場から 徳島大生30人『アグリクラブ』設立」

謝辞

生物資源産業学部の入学者選抜における趣旨の理解から設計・実施に至るまで全面的な協働体制を築いていただいた、生物資源産業学部長の辻明彦教授をはじめ着任された先生方、生物資源産業学部事務課各位、並びに多くの助言をいただいた四国地区国立大学アドミッション担当教員の皆様、そして前村哲史先生と本学入試課各位に心より感謝申し上げます。

